０７／０５／０６　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　牧師

主　　題：華麗なる悲劇
聖書箇所：詩篇　４９篇

今日、私たちは権力と富とに私たちを導こうとする、そのような世の中に生きているのではないかと思います。毎年々々、様々な形で、いや、毎日々々、いろいろな方法で、私たちはより多くの富を持ち、より多くの力を得ることが幸いであるというように教えられています。また、同時に、この世はそういった富や力を持つことができるように、そのような機会をも私たちの周りにたくさん備えているのも事実かもしれません。だからこそ、余計に人々はそれを求めようとし、そのような人生を歩んで行きたいと願うようになっているのではないでしょうか。最近のある統計によると、この世界に億万長者と言われる人たちが、―　皆さん、何人くらいいると思われますか？―　今年（2006 年）は８７０万人を越えるとのことです。さらに、別の調査によると、百億万長者、つまり、資産総額が百億万以上ある人たちが９４６人もいる、しかも、その内の１８７人はこの１年間で新しく百億万円以上の資産を得る者となったというのです。私たちはそういう人たちのことをテレビ番組や雑誌などを通して、その生活ぶりを目にすることがあります。彼らの豪華な豪勢な人生の姿、そのライフスタイルというのは私たちが見ていて何とすばらしいのだろう、何といいのだろう、私もそのようになりたいと感じさせるようなものかもしれません。それゆえに、このような財産を、知名度を力を人々は追い求めて、この瞬間も生きようとしているのです。残念ながら、それはこの世のことだけではありません。キリスト教会の中にあってもそのようなより多くの富を得、より有名になること、より多くの力を得ることがとてもすばらしいものであるかのように考えられることが多々あります。まるでこの世と同じように、教会の中にいる人たちも今この地上でより良い生活を、より楽な生活をして行きたいと願いながら、それを追い求めながら生きていることが多々あるのです。実際、悲しいのはある説教者たちがこのような会衆の心の奥に潜んでいる願望をくすぐって言うのです。あなたがより多くささげるなら神はより多くをあなたに与えてくださると。そして、このような説教者たちは人々をだまして、人々を誘惑して、自らの富を得、自らの知名度を上げ、自ら力をもって生きて行こうと、そのように願う者たちでもあるのです。非常に悲しい現実です。確かに、ここにおられる皆さんは、いや私はそんなことを考えていません、そのようなものを追い求めていませんと言われるでしょう。けれども、直接にそのように追い求めず、この世が求めている成功、資産を、力を求めることをしなくても、私たちはもしかすると彼らと同じことを別の形でしているかもしれません。皆さん、そのような裕福な人たちをテレビなどで見て、あぁ、いいなぁ、と思ったことはありませんか？私も少しでもそのようになれたらと、もし、私たちがそこに嫉妬をし、それを願い求めるとするなら、私たちは直接的にそれを求めている人と変わらないです。なぜなら、私たちの心はそこに行きたいと願っているからそのように嫉妬を抱くのです。この世は、そして、もしかすると私たちも、ああいうふうに私もなりたいとそのように願いながら、いったいだれが次の億万長者でしょうというようなゲームに、この人生の中で参加しているのかもしれません。次は私かもしれない、そうなったらいいのに…と、このような感情、このような願望は決して今この世に初めて起こったことではありません。古い昔から多くの人たちが同じことを考えていました。

聖書の中でもそのことが記されています。富を得て力を得て支配者階級にある人たちと、そして、その反対に、貧しく虐げられている人たちとの差について様々な事柄が記されています。特に、その中にある大きな問題というのは、どうして金持ちで力のある不義を行なう者たちが栄え、義を行なう者が貧しさと虐待の中で苦しんでいなければならないのかという、そのような疑問が聖書の中には何度も記されています。人生というのは何と不公平なのだろう、なぜこんなに間違っているのかと、このような疑問に対して、また、このようなこの世の知恵に対して、富はすばらしい、力はすばらしいと、そのような考え方に対して、今日、皆さんとごいっしょに見て行くこの詩篇４９篇の著者は、私たちに一つの解答を与えてくれます。この著者は私たちに富のすばらしさを訴えようとするこの世の考え方の愚かさを明確に示してくれるのです。確かに、ここで記されていることを私たちがよく理解するなら、それは私たちにとってまったく新しい、今まで知ることのなかった知識ではないことに気付くはずです。けれども、もしかすると、ここで言われていることは、私たちが正しく理解することがなかったことなのかもしれません。今朝、私たちが学んで行きたいことは、ここに書かれている、この詩篇の著者が私たちに教えるすばらしい知恵をしっかり自分のものにすることです。彼はここで私たちにすばらしい本当に必要なことを教えてくれています。私たちの人生をどのように生きて行くべきか、私たちがどのような原則をもって、それに基づいてどのように人生を建てて行くべきなのか、願わくは、この時間を終わると

き私たちが、ではそのように生きて行こうとそのようにごいっしょに思いながら、この教会を今週、また新しい歩みをして行くために出て行くことができれば思います。

☆私たちはどのような原則に基いて生きて行くのか　―詩篇４９篇を通して―

１．注意深く思い巡らす　　１－４節

先ず最初に、この詩篇の著者は私たちが注意深く彼のことばに思いを巡らすようにという、その招待を私たちに教えています。そのことが１－４節に記されています。その中で著者はいったいだれに対してこのことばを語り、何の目的で語っているのかということを教えています。

（１）対象者＝まず、この１－４節の中で、彼がこの詩篇全体を通して対象としている人たちがだれなのかを見ましょう。それが１－２節に記されています。**「すべての国々の民よ。これを聞け。世界に住むすべての者よ。耳を傾けよ。:2 低い者も、尊い者も、富む者も、貧しい者も、ともどもに。」**と。余り難しいことばは記されていません。読めばはっきり分かります。この詩篇は比較的分かり易い詩篇です。１－２節もその通りです。これは全世界の人たちに言っているのです。どの人種も、どんな社会的地位にあっても、どんな人でも、このことばにしっかり耳を傾けないといけないと言うのです。一つ、この中で皆さんに注目していただきたいのは**「世界に住む」**ということばです。ここで訳されているこのことばは、実は、「人生の長さ」と訳すことができる単語でもあるのです。つまり、この著者が言っている対象とする人は、この世に今生きているあなたたち、必ず終わりの来る時間というその枠組みの中にある、いつか過ぎ去ってしまうそのはかない人生の中に生きているあなたたちすべてと言うのです。彼が対象としているのはこれまで生きて来た人たちではないのです。これから生きようとする人たちでもないのです。今、生きているあなたです。今、この地上にいのちを受けて、今、この時間の中で生きている私たちなのです。確かに、この詩篇は３０００年以上も前に書かれましたから、ここで言っている直接に対象となる人たちは、当時のイスラエル人です。けれども、この詩篇の著者は時間を越えて私たちに言うのです。今、この時間という枠組みの中で生きているあなたたち、たとえ、あなたが会社の社長であっても貧しい人であっても、しっかりこのことばに耳を傾けなさいと。

（２）目的＝３－４節に記されています。**「私の口は知恵を語り、私の心は英知を告げる。:4 私はたとえに耳を傾け、立琴に合わせて私のなぞを解き明かそう。」**と。この著者はここから何を教えたかったのでしょう？彼はここで四つの特徴あることばを使っています。それは「知恵、英知、たとえ、なぞ解き」です。この四つのことばは、箴言１：１－６に出て来ます。これはヘブル語の知恵文書である、箴言、詩篇、伝道者の書の中で、知恵をもったことばとして表わされ使われるのです。それぞれ、一つひとつのことばが具体的にどのような意味をもっているのか、どのような違いがあるのか、ここでは余り明確ではありませんが、たとえ、それが何であったとして彼が言わんとしていることは、この四つのことばを使うことによってはっきりしています。彼が強調しているのは「知恵」のことです。すばらしい神が私たちに教えてくださっている「知恵」です。けれども、彼が言わんとしているのはそれだけではありません。余り詳しい説明は時間の関係でできないので簡潔に話したいと思いますが、実は、この３節の後半のことば**「私の心は英知を告げる」**は、残念ながら正確な翻訳ではないように思います。原文を見ると、ここには**「告げる」**という動詞がありません。事実、この部分には動詞がないのです。通常、文章に動詞がない場合は「何々はある」ということばを表わす、英語ではｂｅ動詞というものですが、それがそこに入れられます。英語の聖書を見るとほとんどのものがそのように訳されています。また、同時に、ここには一つ重要なことばが訳されていません。それは「思い巡らす」ということばで、それがここには書かれているのです。実際に、ここの部分を直訳すると「私の口は知恵を語り、私の心の思い巡らすことは英知になる」です。ここで使われているこの「思い巡らす」ということばは、深く考える、注意深くそのことを思うという意味があります。その次を見てください。**「私はたとえに耳を傾け」**、このことばも実は重要なのです。**「耳を傾ける」**というとじっと静かに注意深く聞いている姿を思い浮かべます。ここでは非常にすばらしい描写がされています。自分の指で耳を引っ張るのです。声を聞くために、そのことばに耳を傾けるために耳を引っ張るというのです。端的に言うと、ここで著者は四つの行を使って、**「私の口は知恵を語り」**という「語ること」、そして、最後の行**「立琴に合わせて私のなぞを解き明かそう」**、ここでも「語る」「歌う」ということばが使われています。つまり、この二つは人々に告げることが記されています。そして、その間に挟まって言われていること**「私の心は英知を告げる」「私はたとえに耳を傾け」**は、その語られている事柄に注意深く耳を傾け、そこで言われていることを深く思い巡らすことなのです。つまり、この詩篇の著者は「すべての民よ、この時間の中に生きるあらゆる人々よ、私が語る知恵のことばにしっかり耳を傾け、そのことを深く思い巡らし、それをしっかり理解しなさい」と言っているのです。実は、「しっかり理解する」「深く思い巡らす」というのは、この詩篇全体を理解する上で大切な事柄となります。そのことは最後の部分で見たいと思います。

よく覚えて置いてください。１番目にこの著者は私たちに一つの招待をするのです。注意深く思い巡らしなさいと。では、いったい私たちは何に思い巡らすのでしょう？そのことが２番目のセクションに記されています。

２．何に思い巡らすのか　　５－１２節

日本語の聖書を見ていて時々残念だなと思うことは、特に詩篇には行間があります。ここでも４節と５節の間、９節と１０節の間、１３節と１４節の間、そして、１５節と１６節の間に１行空いています。これを見ると私たちは自動的にそこに区切りがあるのだと考えます。そうすると、この４９篇は五つの部分に分けることができます。けれども、原文を見るとはっきり分かるのは、この詩篇は三つの部分に分けることができるということです。１番目に話した１－４節まで、これが序文に当たりますが、そこでは彼が私たちを招待してくれています。耳を傾けなさい、思い巡らしなさい、これから語ることにと…。２番目の部分と３番目の部分は、５－１２節までと１３－２０節のところです。なぜ、このように分けることができるのか、それはそれぞれの終わりの部分、つまり、１２節と２０節で全く同じことばが繰り返されているからです。訳者は非常に苦労してこのことばを訳されたことが、この二つの訳文を見るとよく分かります。ただ残念ながら、ヘブル語の聖書が記しているほど明確にその部分が出てきません。それが翻訳の限界かもしれません。ここで繰り返されている概念は「栄華のうちにある人は滅びうせる獣に等しい」ということです。そのことばが全く同じ形で１２節と２０節に繰り返されています。ただ一つ違うところは、「栄華のうちに」と「滅びうせる獣に等しい」ということばの間に入っていることばです。１２節では**「うちにとどまれない」**ということば、２０節では**「悟りがなければ」**ということばです。ただ、この二つの部分のヘブル語の原文を読むと音が非常に似ているのです。ですから、意図的にこのようにされているのです。なぜなら、１２節までの部分と２０節までの部分は二つセットになっていると言うのです。私たちがこのセクション分けをしっかりするなら、この詩篇がより分かり易くなります。彼が言いたかった「知恵」は実はこの繰り返されている１２節と２０節の部分にあったのです。そして、そこに向かって彼のメッセージは進んで行くのです。私たちが知らなければいけない部分、覚えておくべき部分もそのことなのです。ですから、今私たちは分割をしました。１－４節と５－１２節、１３－２０節と三つの部分に分かれます。１－４節は私たちへの招待でした。

２番目は私たちが何に耳を傾けるのかということです。そこで彼は、この世の憶説、仮定、この世がその通りだと思っている考え方に対する検証をするのです。ですから、その検証を見て行きましょう。まず初めに、この世がしている仮定があります。５－６節にそれが記されています。ここで著者は修辞的な疑問を私たちに投げかけています。非常におおげさな、しかも、答えがはっきりしている疑問です。彼は言います。５節**「どうして私は、わざわいの日に、恐れなければならないのか。私を取り囲んで中傷する者の悪意を。」**と、これはだれかに答えを求めているわけではありません。答えは明らかです。「その必要はありません」というのが答えです。なぜ、私は恐れるのか、たとえ、ときが悪かったとしても、たとえ、私の敵が私を囲んだとしても、この著者は私たちは恐れる必要はないと教えたかったのです。そして、彼はこの敵がどのような人物かということ、その詳細を６節で説明するのです。**「おのれの財産に信頼する者どもや、豊かな富を誇る者どもを。」**と、これらのことばからはっきり分かることは、彼がここで想定している人物、私を**「私を取り囲んで中傷する者」**たちというのは、財産に信頼し豊かな富を誇る者たちです。つまり、この地上での生涯にあって、今風なことばを使うなら、勝ち組の人たちです。経済的な成功というのは、しばしば私たちの人生に安心をもたらすと私たちは考えます。私たちが豊かにもっていること、それは、人々に対して、人生のうちに起こって来るあらゆる問題に打ち勝つ力を与えているのだと思わせることがあるのです。蓄えがあれば大丈夫、これだけ持っていれば大丈夫と、だから、私たちは預金通帳を見てニャっと笑うのです。その額が減ると不安になるのです。まるで、そのように多くのものを持ってさえいれば、財産があれば、資産があれば、豊かな富があれば、私は人生のあらゆる問題に対して、その影響を受けることなく、まるで、難攻不落な砦を築いているかのように考えるのです。同時に、ここで言われていることはこのようなことを私たちに示唆します。それは、このような富を持たず、貧困と地位の低さのゆえに人生において負け組みというラベルを貼られている人たちは、その生涯に起こるあらゆることに恐れを抱いているということです。このような人たちはあらゆることに不安を抱いています。次にこんなことがあったらどうしょう、あんなことがあったらどうしようと、そして、彼は常につぶやいています。私もあのようだったらいいのになぁと…。古き昔から今に至っても、この世が私たちに教える仮定、これが正しいのですよというその推測は変わっていません。私たちが財産を所有しているなら私たちは安全を安心を得ることができる、もっと持っていればもっと安心で安全で幸いな生涯を得ることができますと、それがこの世が私たちに教える知恵だったのです。

でも、この詩篇の著者は私たちに言うのです。「それは本当ですか？本当にあなたはそのような状況の中でそれを恐れていなければいけないのですか？そうでありたいと願い、それを追い求めて生きて行

かないといけないのですか？それだけのものを持っているから私は安心だと人生の問題の上にあぐらをかいて生きて行くことができるのですか？」と、そして、彼の検証が始まります。二つ検証します。

検証１＝７－９節にあります。この検証は彼が疑問としていることです。それは「いったいだれが自分のたましいを買うことができるのか」、それが検証（１）です。著者は言います。**「人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。自分の身のしろ金を神に払うことはできない。:8 ――たましいの贖いしろは、高価であり、永久にあきらめなくてはならない。――:9 人はとこしえまでも生きながらえるであろうか。墓を見ないであろうか。」**と。著者は非常に明確で、しかも、余りにも単純な答えを私たちに示してくれます。彼は言います、この世が私たちに教えようとすること、これが正しいのですよと私たちに訴えかけるその知恵は決して正しくないと。なぜなら、最も富を得ている人であっても、彼は自分のたましいを買い取ることができないし、必ずやって来る死から逃れることはないからです。この「たましいを買い取る」ということはある意味変わった考え方かもしれません。けれども、この世に生きて来たすべての人たちの生涯を見たとき、その事実は否めない、その通り見ることができるのではないでしょうか？人間の歴史を見たとき、私たちはいろいろなところでこのことを見ます。人はなぜか自分の所有財産によって永遠のいのちを買い取ることができると考えるのです。私たち日本人にもそのような風習というのがありましたし、今でも残っているでしょう。古代文明であるエジプトやバビロニヤ、その他世界のあらゆる国々にあって人々は皆思うのです、何とかして、これだけあれば私は自分のいのちを買い取ることができると。まるで、持っている財産によって天国への切符を購入することができるかのように。人々は一生懸命富を蓄えれば永遠のいのちへと、人生の終わりがやって来るときに、有利な立場にあるのではないかと考えて、そのように富を積み上げてきたのです。けれども、この著者ははっきり言います。**「人はとこしえまでも生きながらえるであろうか。墓を見ないであろうか。」**と。財産はいのちを買い取ることはできません。どのような資産家であったとしても、必ず、彼らは墓を見るのです。イエスも同じことを言われました。弟子たちに対してこんなことばを語っています。マタイ１６：２６**「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」**と、イエスが言われていることははっきり分かります。詩篇の著者が言わんとしていることも同じようにはっきり分かります。人は全世界を手に入れたとして、もし、自分のいのちを得ることがなかったなら、それはいったい何の得になるのか、それが何の有利さをもたらすか、だれが自分のたましいを買い取ることができるのか、著者は８節でこのように言います。**「たましいの贖いしろは、高価であり、永久にあきらめなくてはならない。」**と、どれだけ財産を積み上げたとしても自分のたましいを贖うことはできない、それを買い取ることはできないというのです。確かに、イスラエルの民は毎年々々自分のたましいの贖いのためにいけにえをささげていました。けれども、彼らはそのいけにえが彼らのたましいを贖わないことをよく分かっていました。彼らがどれだけ多くの犠牲をもって神にささげたとしても、そのささげものが彼らを贖うのではないことをよく知っていたのです。だから、彼らは毎年同じことを繰り返さなければいけなかったのです。どのようなすばらしい犠牲のささげものであったとしても、金や銀や何であっても、人は自分のたましいを買い取ることはできません。そのたましいは罪の奴隷の中にあり、罪が人々を支配し、その中から私たちは自分自身を買い取ることができないがゆえに、どれだけ財産をもっていても、終わりにはそれは何の役にも立ちませんよと言うのです。

いったい、この著者はここで何を言いたいのでしょう？なぜ、このようなことを考えなさい、これによって生きなさいというのでしょう？ここで言われていることは何度も言うようにはっきりしています。それは、私たちは何をもってしても自分の人生を、自分の永遠のいのちを買い取ることはできないということです。どれだけ多くのものを持っていたとしても、私たちが持つことができるものというのは、私のたましいを買い取るほど高価なものはないと言うのです。もし、それが正しいとするなら、いったいなぜあなたはあなたよりも本当は有利でもない人たちを恐れなければいけないのですか？彼らが恐れていたこと、特に、貧しい人たちが恐れていたことは、あんなに多くのものを持っている人たちがいる、彼らはすばらしいではないかと…。しかし、著者は「それは愚かな考えですよ、彼らは全然すばらしくない、なぜなら、いったいだれがその財産によって自分のたましいを買い戻すことができるのですか」と言ったのです。人生の真の価値はこの地上の財産にはありません。その価値は自分のたましいが贖われているかいないかにあるのです。

検証２：１０－１１節に記されています。詩篇の著者はまだ話を終えていないのです。彼は１０節でもう一つはっきりした事柄を告げています。ここで検証することは、本当に富を得ている者たちが有利なのかどうかです。**「:10 彼は見る。知恵のある者たちが死に、愚か者もまぬけ者もひとしく滅び、自分の財産を他人に残すのを。:11 彼らは、心の中で、彼らの家は永遠に続き、その住まいは代々にまで及ぶと思い、自分たちの土地に、自分たちの名をつける。」**と。多くの富を持ち貧しい者たちの上に君臨する勝ち組の人たちに、本当の有利があるのだろうか？彼の答えは明らかです「全くありません」と言います。いったい人がど

れほど様々なものをこの地上でもっていたとしても、その人は永遠のときにそれをもって行くことができないのだと言うのです。あなたが賢い者であっても愚かな者であってもそれは全く関係ありません。皆同じように死を迎え、皆同じようにもっているものを永遠へともち続けることはできないのです。この地上での財産、地上での宝、地上での富、地上での力を…。これは別に新しい真理ではありません。皆さんよく分かっていることです、毎日の生活の中で、また、みことばを通しても。

ソロモンは伝道者の書の中でこのようなことばを私たちに語っています。２：１６**「事実、知恵ある者も愚かな者も、いつまでも記憶されることはない。日がたつと、いっさいは忘れられてしまう。知恵ある者も愚かな者とともに死んでいなくなる。」**と、言っていることは同じです。あなたは持って行くことができない、みんな他の人のものになる、皆死んでいなくなると。皆さん覚えておられるでしょう、イエスのたとえ話、金持ちの話です。豊作でたくさんの作物を蓄えます。そのために蔵を建てますが、いっぱいになります。そこでその人は言います。ルカの福音書１２章に記されていますが、**「:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』**と、まさに、今見てきた財産をもっている人たちの生き方ではないでしょうか？富があれば蓄えがあれば力があれば私たちは安心して生きることができると。神は何と言われたでしょう？**「:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』**と。詩篇の著者はここで金持ちがもっている自分の資産、財産に対する信頼がいかにはかなく愚かなものであるのかを教えているのです。彼らは自分の名前が永遠に残るのではないか、自分の住まいが永遠に続くのではないかと思ったのです。けれども、彼らが唯一もっていた永遠の住まいは彼らの墓だけです。皆そこに納まるのです。

私たちは忘れてはいけません。今どんなに勝ち組の人たちと負け組みの人たちとの点差が開いていたとしても、私たちの人生には必ず究極的な同点打が待っています。それは「死」です。野球のゲームを想像してください。９回の裏、４点差で負けています、２アウト満塁、撃ち取れば相手の勝利です。野球はこの後どうなるかわかりません。けれども、私たちの人生において９回の裏２アウト満塁、最後の一球が投げられたその瞬間、必ずホームランが打たれます。打者はだれでしょう？彼の名前は「死」です。振り出しに戻るのです。たとえどれだけ点差が開いているように見えても皆同じ場所に立つのです。そのことをこの著者はよく覚えておきなさいと言います。検証の結果、この世の推測は正しくないということが分かったのです。だれ一人として財産によって自分のいのちを買い取ることもできないし、だれ一人として有利な者もいないと。そして、彼は１２節で結論を告げます。**「しかし人は、その栄華のうちにとどまれない。人は滅びうせる獣に等しい。」**と。財産、力、この地上における様々な事柄に信頼を置く者の愚かさがここに記されています。いったい金持ちであることの何がすばらしいのでしょう？いったい多くの力を得、権力を得、富を得ていることのどこが良いことなのでしょう？今、過ぎ去って行くこの世に生きている私たちは、この地上でのはかない生涯がいつか終わるということを覚えておかなければいけません。いったいどれだけ一生懸命努力したとしても、いったいどれだけ死がやって来ることを考えまいと心がけたとしても、必ず、それは私たちにやって来ます。そして、その死は私たちがもっているすべてのものを取り去ります。だから、著者は言います。私たちに箴言を、金言を残すのです。**「人は、その栄華のうちにとどまれない。人は滅びうせる獣に等しい。」**と。

私たちはよく考えなければいけません。この地上の惑わしに惑わされてはいけないのです。欺かれてはいけないのです。財産がすべてではありません。私たちには必ず死がやって来るのです。

３．結論によってもたらされた必然的な結果　　１３－２０節

この検証を見た上で、箴言が語られた上で出てくる必然的な結果です。そのことが１３－２０節に記されています。

（１）愚かな者たちへの結果＝最初に著者は悪者に対する結果を１３－１４節に記しています。１３節**「これが愚か者どもの道、彼らに従い、彼らの言うことを受け入れる者どもの道である。」**、今まで言ってきたこと、そして、１２節でまとめられていること、それこそが愚かな人たち、神に逆らい神を愛そうとしない者たちの歩みだと言います。１４節には**「彼らは羊のようによみに定められ、死が彼らの羊飼いとなる。朝は、直ぐな者が彼らを支配する。彼らのかたちはなくなり、よみがその住む所となる。」**とあります。ここで１３節と１４節の間に「セラ」ということばがあります。１５節にもあります。このことばは実際にどのような意味があるのかよく分かっていません。今私たちが知っていることは、これは多分、詩篇が歌われたときに、そこで休止符を打ったり、クレッセンドといってだんだん大きな音に変わって行くとか、ここで間奏が入りますという、そのような意味合いを記すためにあると考えられています。その通りだと思います。けれども、私たちがよく覚えておかなければいけないことがあります。それは、これがあるとここで止まります、何かの変化が起こるからです。変化というのはまさに著者が言わんとすることです。ここで言っていることをよく考えなさい、そこでいったん止まって、ここで言われていることの

対応を現わしなさい、その対応はだんだん声が大きくなったり、間奏があって言われていることを思い巡らしたりとか、そのようなことが起こるのです。では、いったいここで何を思い巡らしなさいと著者は言うのでしょう？それはまさに、この地上の知恵にだまされてはいけないということです。こんな愚かな歩みをしてはいけないと。だから、１４節にこのような人たちは**「よみに定められ」**ていると言います。彼らが行くところは彼らが計画しているところとは全く違う、死んだ者たちがいるところにしか行かないのだ、しかも、非常な皮肉が記されています、**「死が彼らの羊飼い」**だと。詩篇２３篇を思い出します、**「主は私の羊飼い。」**と、神を信じる者たちはこのように言うことができますが、私は神の導きなどいらないと言って、自分の力に信頼し自分の力で生きて行こうとする人たちは、実は、死という羊飼いに導かれたのです。何と愚かな生き方でしょう、何と悲しい結末でしょう。確かに、この地上では彼らの人生は栄華に満ちているでしょう。確かに、この地上では人からの「羨ましい」という声をさんざん聞きながら生きるそんな生涯かもしれません。でも、そのすべては「よみ」に向かっているのです。

（２）正しい者たちへの結果＝

それに対して、正しい者たちに対する結果が１５－１９節に記されています。このような悲劇の真中にあって、著者は希望を失わないのです。いやむしろ、しっかりした希望をもっています。彼は言います。１５節**「しかし神は…」**と、彼は確かに希望をもっていたのです。皆さん、覚えておられますか？いったいだれが自分のたましいを買い戻すことができましたか？だれもできませんでした。それは余りにも高価だったからです。でも、著者はたましいを買い戻すことができる方を知っていたのです。**「しかし神は私のたましいをよみの手から買い戻される。」**と。Ｉペテロ１：１８－１９でペテロはこのことをこのように説明しています。**「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、:19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」**、それによって私たちは贖われるのです。キリストの為したみわざが私たちを永遠の滅びから救い出してくれるのです。神の御子は私たちの罪の支配からの解放を与えてくれるのです。

「よみの手から買い戻される」、それだけではありません、**「神が私を受け入れてくださるからだ。」**と言います。ここで使われている**「受け入れる」**ということばは、創世記５：２４に出てくることばと同じなのです。エノクが神とともに歩んで神はエノクを取られたという、それと同じことばです。**「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」**。神は単に私たちを買い戻してくださるだけではないのです。まるで、エノクが神とともに歩んだゆえに、神によって受け入れられ神によって取られたように、私たちも神によって買い取られた今、神に受け入れられる者になったのだということです。そして、１６節から著者は最初に彼がした質問に詳細に答えて行きます。いったいだれを恐れるべきでしょう？どうして恐れなければいけないのでしょう？その答えは**「恐れるな。…」**と、恐れる必要はないのです。なぜなら、死が必ずやって来るからです。そして、もし私たちがその死に打ち勝つ贖いを得ているとするなら、どんな状況に置かれているとしても、私たちは他の人たちを恐れる必要はないのです。１６－１９節**「恐れるな。人が富を得ても、その人の家の栄誉が増し加わっても。:17 人は、死ぬとき、何一つ持って行くことができず、その栄誉も彼に従って下っては行かないのだ。:18 彼が生きている間、自分を祝福できても、また、あなたが幸いな暮らしをしているために、人々があなたをほめたたえても。:19 あなたは、自分の先祖の世代に行き、彼らは決して光を見ないであろう。」**。イエスはこのことをこのように説明されました。**「:19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。:20 自分の宝は、天にたくわえなさい。」**（マタイ６：１９－２０ａ）。

そして、彼は最後に私たちに結論を教えます。２０節**「人はその栄華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい。」**、**「悟りがなければ」**と言います。なぜ著者は最初に「悟りをもちなさい」と言ったのでしょう？なぜ「私の知恵に耳を傾けなさい」と私たちを招待したのでしょう？そのことを深く思い巡らしてそれをしっかり理解しそれを自分のものとして歩みなさいと、私たちに呼び掛けたのでしょう？２０節が答えです。もし、皆さんがこの悟りを得ずに、この地上の事柄に目を向けて、そこに宝を積もうと努力して生きるとするなら、皆さんは滅びうせる獣と同じです。皆さんを待っているのは神の前にある永遠のさばきです。でも、救われた私たちは違うはずです。私たちは贖いを得て、私たちは今まさに天に宝を積んで生きる者へと変えられたのです。それなら、私たちはどのように生きるのでしょう？私たちはこのことを知った上でどのような人生を歩もうとするのでしょう？それが私たちに求められている、考えなければならない、深く思い巡らさなければならないことなのです。

いったい、いつ私はこのニュースを見たのか覚えていません、多分１０数年前になると思いますが、忘れられないのです。ある一人の少年へのインタビューでした。丁度、正月が明けてまだ三が日中ではなかったかと思いますが、レポーターが子どもにマイクを向けて聞くのです。あなたは今年いくら位お年玉をもらいましたか？と。彼は額を答えました。１０歳位の子どもだったかなと思います、１０歳にしてはずいぶんもらっていると記憶していますから。そのレポーターは聞きました、これをあなたは何

に使いますか？と。この子は何と答えたでしょう？彼はこう言いました、「老後のために蓄えて置きます」と。彼は今２０歳位でしょう。どんな人になっているでしょう？私たちも実は同じことをしているのです。このような話を聞くと、何と可哀想なのだろう、何と愚かなのだろうと考えます。１０歳の子どもが老後のために蓄えます、でも、死は必ずやって来るのです。人はその栄華の中にあったとしても、滅びうせる獣と同じです。もし、私たちが悟りを得ていないとするなら。

願わくは、皆さんが悟りを得ていて、獣と同じ人生を歩まないように、むしろ、死が必ずやって来ることを知り、その死を前にして、神が私を受け入れてくださるというその確信のともに、この地上での生涯を全うすることができるように。詩篇の著者はこの知恵を私たちに残してくれました。その知恵に深く思い巡らせて、この地上での生涯を全うして行きたいと思います。